





彼女に出会ったのは南国の美しいビーチだった。
俺は、休暇で訪れた島にいた女性に
一目惚れをした。



名前はティファ。
歳は23歳で俺より一つ年上だ。



ティファは、黒髪にルビーのように赤い瞳で整った顔立ちをしている。スタイルも抜群で胸は大きく腰はくびれていて尻が引き締まっている。身長も高い165センチくらいある。

スタイル抜群のモデル体型なのに巨乳というアンバランスさがまた良い。俺は彼女に見とれていた。



「どうしたんですか？」
ティファが話しかけてきた。



「ああ、ごめんなさい。あなたの美しさに見とれてました」
俺は正直な気持ちを伝えた。



「あら？お上手ですね。でもありがとうございます」
ティファはニッコリ笑って言った。
その笑顔を見た瞬間、俺は恋に落ちた。

「良かったら一緒に遊びませんか？」
俺は勇気を出して誘ってみた。



「ええ いいですよ」
ティファは快くOKしてくれた。





ティファを見ると彼女はタンクトップとビキニを着ている。
胸が大きくて形が良いから、乳首の形がくっきりわかるほど浮き出ている。
しかも下はTバックでヒップラインもはっきり分かる。

俺は興奮していた。



そんな俺を見てティファはクスツと笑っていた。
「私の体に興味があるのかな？」

ティファはいたずらっぽく言ってきた。



「もちろんありますよ！あなたのような素敵な女性の体は見たくなります！」
俺は力強く答えた。

するとティファは、自分の胸を寄せたり上げたりして強調し始めた。
俺はゴクリと唾を飲み込んだ。





気付けば夕方になっていた。
俺たちは砂浜に座り、夕焼けを見ながら会話をしていた。

「ねえ……私ね、好きな人がいるんだよね」
突然ティファが告白してきた。



…正直ショックだった。

こんなきれいな人に彼氏がないわけがない。
当然と言えば当然。
わかってはいたけど…



「そうですか。ちなみにどんな方なんですか？」
俺は興味本位で聞いてみた。

「うん、すごく優しい人でね。いつも守ってくれるの。
私がピンチになると助けてくれるし。
それから……」



ティファは嬉しそうに話している。
どうやらティファはその人のことが本当に好きらしい。
「羨ましいです。そこまで想われているなんて……。」
俺は思わず呟いた。



「でも、いつも仕事で忙しそうでなかなか会えないんだ」
ティファは少し寂しげな表情になった。



「俺ならそんな寂しい思いはさせない
けどな」
俺はつい口に出してしまった。
それを聞いたティファは驚いた顔をした。
そして しばらく沈黙が続いた。



「あのさ……もし良かったら今夜付き合ってくれないかな？」
突然ティファが提案してきた。



「えっ！？それはどういう意味でしょうか？」
俺は戸惑ってしまった。
「そのままの意味だよ。私は君と一夜を共にしたいと思ってるんだよ」
ティファは妖艶な微笑みを浮かべながら言った。

その言葉を聞いて心臓が高鳴った



まさかこんな展開になるなんて思ってもいなかった。

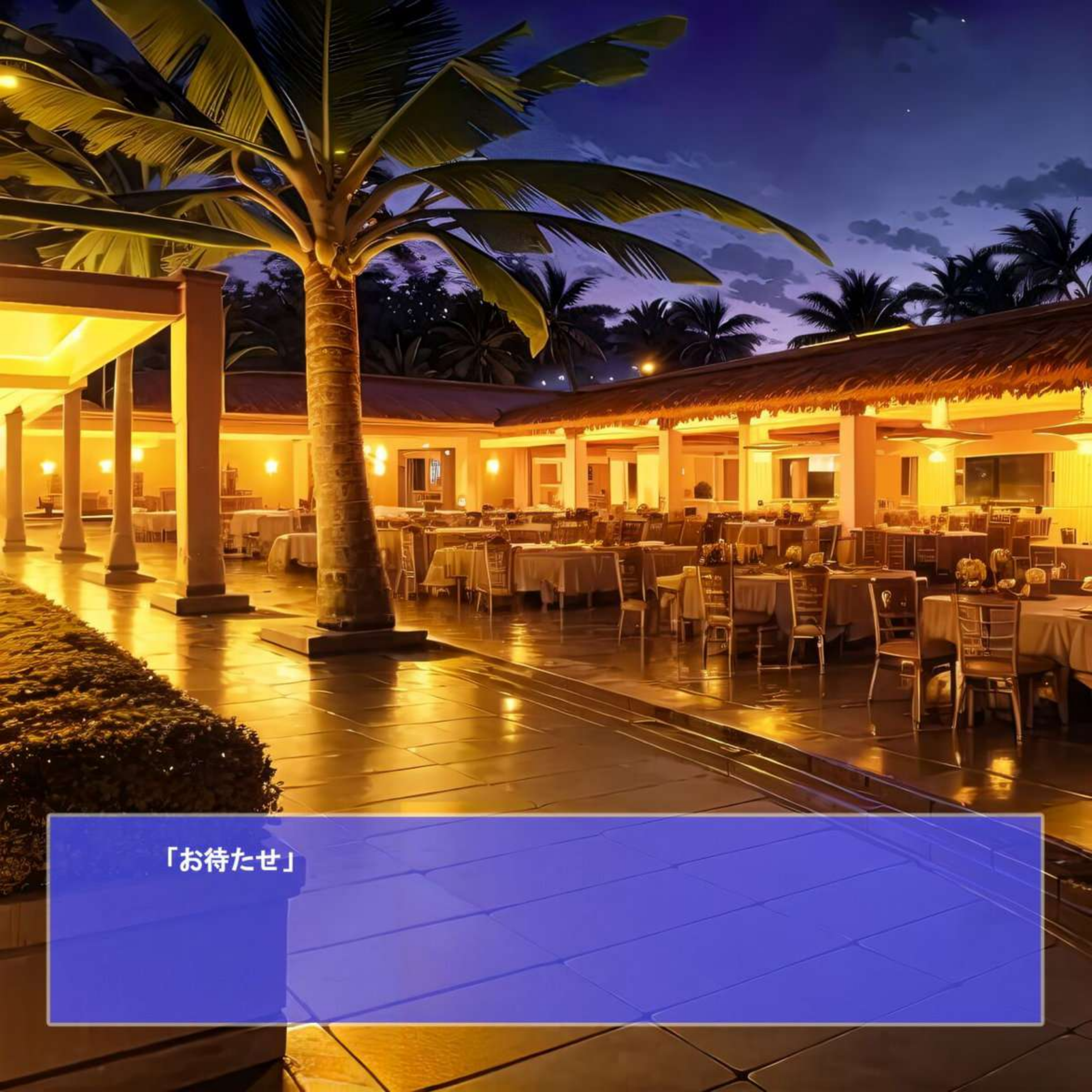
「わかりました。ぜひお願いします」
俺は緊張しながら返事をした。





その後、俺たちはホテルに戻りラウンジで飲む約束をした。

俺は待ちきれなくて約束の時間より30分早く来てしまった。
心地よいBGMが流れているが思ったよりも客がいない。
そのことが余計に俺をソワソワさせた。



「お待たせ」





ティファが青いドレス姿で現れた。
その姿はとても美しく見惚れてしまった。



「どうしたの？そんなに見つめて」
ティファは不思議そうに言った。

「いえ、あまりにも綺麗だったので見とれてしまいました」
俺は正直に伝えた。



「ふーん、そっかあ。ありがとう。嬉しいわ」
ティファは満更でもない感じだった。

大きく空いた胸元と深いスリットのドレスがセクシーさを際立たせている。



まさかと思ったがどうやら下着を着けていないようだ。
胸の先端が見えそうだし、太腿の奥まで見えそうだ。

俺はドキドキしていた。



「それじゃあ飲もうか」
ティファに誘われてカクテルを飲むことになった。





しかし俺は酒には強いほうだが、ティファはものすごいペースで飲んでいる。すでに5杯目に突入している。

大丈夫だろうか……？ 俺は心配になり声をかけた。



「ちょっと飲みすぎじゃないですか？」

「何言ってるのよ。まだまだこれからじゃん！」
ティファはケロツとした顔で言い返した。
その後もハイペースのまま飲み続けた。



6杯目の時、ティファの顔が赤くなり目がトロンとしている。
明らかに酔っている状態だ。

「ティファさん。お水もらってきましようか？」
俺は優しく問いかけた。



「いない。それよりこっち来て……」
ティファは俺の手を引いて隣に座らせた。





...ん♡

そして、いきなり**キス**をしてきた。
舌を入れられ絡ませてくる。



俺はティファが積極的すぎると思いながらも受け入れた。
ティファはさらに激しく求めてきた。

俺は理性を失いそうになった。



「ねえ……ベッド行こうか？」
ティファは耳元で囁いた。

その言葉で俺は完全にスイッチが入った。
俺はティファをお姫様抱っこして寝室へ向かった。





寝室に入るなり
俺はティファに覆いかぶさるように後ろから豊満な胸を鷲掴みにした。
手に伝わるその柔らかさと重み、そしてティファの匂いが脳の奥を刺激して
より一層興奮させた。

「すごく素敵だよ……」



ツンツン
ツンツン

「あん……気持ちいいよお」
ティファは甘い声で言った。



ツギツギツギツギツギツギ

キーン
ツギツギツギツギ

俺は胸の先端をつまんで弄んだ。
さらに強くつまみ上げるとティファは大きく喘いだ。
「あああっ！！ダメえ……そんなに強くしたらイッちゃう！！」
ティファはビクビク震えた。

どうやら軽くイッたらしい。



あぁあっ
あぁあっ
あぁあっ

俺はティファの下腹部に手を伸ばしドレスを捲り上げた。
そして濡れた秘部に中指を入れた。

するとティファは「あぁあっ」と声を上げた。
俺はゆっくりと動かし始めた。



ティファの秘部がチャプチャプと音を鳴らし始めた。
「すごい濡れてますよ」

「いやあ、はずかしい・・・ああ・・・」
恥らいながらもティファは快楽に身を委ねていた。



あーん♡
あーん♡

あーん♡
あーん♡

「はあ……はあ……もっと……奥まで入れて欲しい」
ティファは切なげな表情で言った。





あ
あ
あ
あ
あ

俺はティファの足を持ち上げ
そして一気に挿入した。

「ああっ！入ってくるう」
ティファは歓喜の声を上げていた。
そして腰を動かし始めた。



パン！パン！という音が部屋に響き渡る。

ティファの膣内は温かくヌルヌルしていて気持ちが良い。
俺は何度もピストンを繰り返した。
するとティファが絶頂を迎えたのか 痙攣し始めた。
同時にティファの体が熱くなってきた。



「ねえ……熱いの……あなたの精液が欲しいの」
ティファは涙目で訴えかけてきた。



ああ♡

あゝ

ひんあッ♡

せろ♡
ん♡

Fii
お

俺はティファの足を高く上げて、子宮口を突き上げた。
「イクウ！出して欲しいの！いっぱい注いでえ！」
ティファは叫びながら果てた。
それと同時に俺も射精した。
ドクンドクンと脈打ちながら大量の精子を流し込んだ。





ティファは放心状態だった。

パクパクと動いているティファのアソコから大量の精液が
滴り落ちている。



その光景が異様なほどいやらしく
俺の目に映った。
「そんなにじっくり見ないで…」

「素敵ですよティファさん」
俺はティファの隣に横になって抱きしめた。



おとこ

ティファは幸せそうな顔をしていた。
そして俺たちは眠りについた。




A photograph of a hotel room. In the center is a bed with a dark wood headboard, two white pillows, and white linens. On either side of the bed is a wooden bedside table with a lit lamp. The wall behind the bed is a light beige color. To the right, there is a window with light-colored curtains. The room is dimly lit, with the primary light source being the bedside lamps and a wall sconce on the left.

翌朝、目を覚ますとティファの姿はなかった。

ティファを探しに部屋を出た。





ティファはビーチチェアに座って海を見つめている。
俺は後ろから近づいて肩を抱いた。





「おはようございます」

「うん、おはよう」
ティファは笑顔で答えてくれた。



「昨日は楽しかったですね」

「うん、最高だったよ」
ティファは満足げな表情をしている。



「あっこら、変なとこ触っちゃダメ」
ティファは嫌がっているものの、まんざらでもなさそうだ。

「乳首、透けてますよ？」
「もう…エッチなんだから」



お互いの体が徐々に熱を帯び始めていた。
俺達は人気の無い場所へ移動した。





そしてティファは挑発的なポーズで誘ってきた。
透けたタンクトップと股に食い込む黒パンがティファのいやらしい身体を
より一層引き立たせる。

「ねえ……もう一回しない？」



「喜んで」

俺は待っていましたとばかりにティファを押し倒した。
そしてむしり取るかのようにタンクトップとパンツを剥ぎ取った。



美しい裸体を見て興奮する。
「ねえ……早くして……もう我慢できないの」
ティファは恥ずかしそうに言った。





「わかりました」
俺はティファの割れ目に自分のモノをあてがい挿入した。

「ああっ！入ってきた！」
ティファは喜びに満ちた表情になった。



あはは

あはは

俺はゆっくり動き出した。

「はあ……はあ……」
ティファは艶やかな声を出している。



俺は無言で激しく動いた。

「はあん……激しいい……」ティファは快楽に浸っていた。

「ティファさん……そろそろ……」



ティファは俺の背中に手を回しギュッと抱きついた。
そして、ティファの最深部へ突き入れた。
「あああああ！！！」

ティファは大きな声で叫んだ。と同時に俺とティファは同時に果てた。





ティファの中に大量の精子を放出した。
ティファはぐったりしている。

白濁液があふれだし、
別の生き物のようにピクピクとひくついてる秘部がやけに
いやらしかった。



〜

〜

アゲアゲ

「向こうで体流してくるね」
ティファはフラつきながらガーデンプールへ向かった。
俺はこっそり後をつけた。





全裸のティファが水浴びをしている。

が、柵が邪魔で肝心なところが見えない！
これではノゾキに来た意味が無い。



「仕方がない。」
俺は強硬手段を取ることにした。





俺はティファの背後に回った。

「おお・・・」
まるで彫刻のような美しさだ。俺は見とれてしまっていた。
陽の光が一糸まとわぬ彼女を照らし神秘的だった。



ティファは俺に気づいていない。

俺はティファの背後から近寄り
腕を掴んだ。





「きゃっ!？」
ティファは驚いて振り向いた。

「びっくりしたあ……。いつの間に後ろに居たの？」
「ついさっきですよ」
俺はニヤリと笑った。



「ん」
「ん」
「ん」
「ん」
「ん」

「もう、エッチなんだから」
ティファは頬を膨らませた。

「ん」
「ん」
「ん」
「ん」



軽く抵抗するティファ。
俺はティファのすべすべの尻に自分のモノを押し付けた。

「あん♡変なの当たってる！」
歓喜と恥ずかしさが入り混じった声が俺を興奮させた。



「さっき出したばかりなのに、もうこんなに？」
ティファは驚きながらも興奮しているようだ。





俺はティファの片足を持ち上げて開脚させた。
「ちょっ！？何やってるの！？」
ティファは慌てふためいているが、俺は構わず続けた。

「もう……しょうがないな」
ティファは呆れた様子で俺を受け入れた。

ぬるぬる

そしてそのままティファの中に挿入した。
「ああっ……入ってくる」
ティファは嬉しそうだ。
俺は激しく突いた。
「ああっ！すごいよお！」
ティファは快感に耐えきれず体を仰け反らせている。



俺はさらにスピードを上げて攻め立てた。
「ダメっ、そんなにしたらいっちゃう！」
ティファは涙を流しながら懇願してきた。



俺はラストスパートをかけた。
「ああっ、出るぞ！」

「きてえ、中にちょうだい！」



ドピュッドピュービュールルル—————！！
ティファの膣内に大量の精子が注ぎ込まれた。

「はあはあ……すごい量……」
ティファは満足そうに呟っていた。



俺はティファの中から抜いた。
すると、ドロっとした白い液体が流れ出てきた。
「ティファさんのここが欲しがってたのでたくさん出しました」
俺はティファの股間を指して言った。



ティファは照れ笑いを浮かべている。

「ねえ……もう一回しようか？」
ティファは甘えたような声を出した。

「もちろん」



俺は再びティファを押し倒してセックスを始めた。

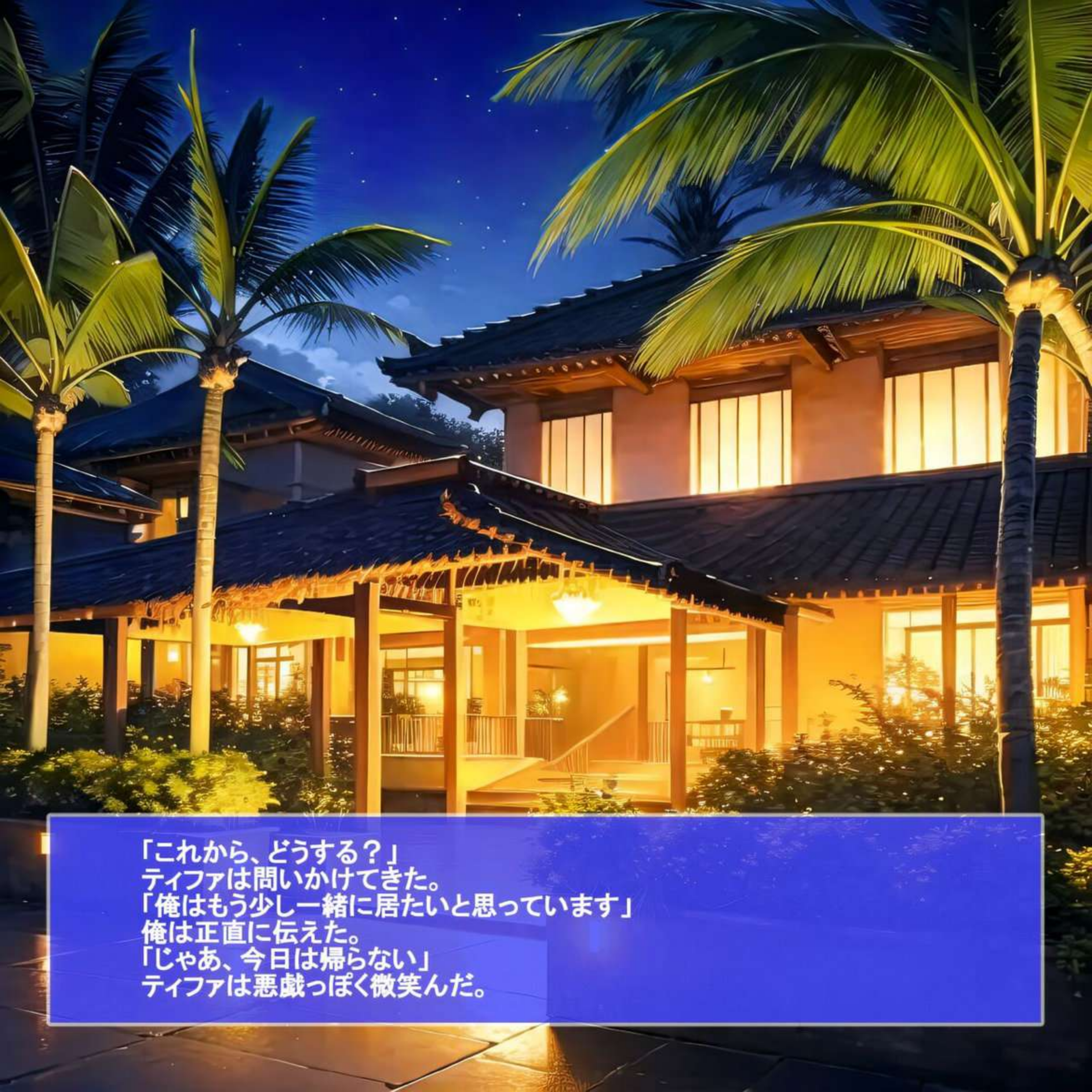
その後何度も交わり続け 気が付けば夕方になっていた。





俺はティファをホテルのレストランへ連れていった。
食事を終えた後は二人で散歩をした。

俺はティファの手を握った。



「これから、どうする？」
ティファは問いかけてきた。
「俺はもう少し一緒に居たいと思っています」
俺は正直に伝えた。
「じゃあ、今日は帰らない」
ティファは悪戯っぽく微笑んだ。



「わかりました」
俺も笑顔で返した。

それから俺たちは貸し切りの浴場へと向かった



A night-time scene of a luxurious outdoor hot spring bath. The pool is illuminated with a warm, golden light, reflecting the surrounding environment. The pool is surrounded by a tiled deck and a low wall with integrated lighting. In the background, there are palm trees and a building with a covered walkway. The sky is dark with stars, and the overall atmosphere is serene and elegant.

貸切とは思えないほど広いプールのような露天風呂だ。
「すごい、こんな豪華な風呂が貸切なんて贅沢だよね」

ティファもご満悦のようだ。





ティファはご機嫌の様子で服を脱ぎ始めた。
俺はティファの裸体に釘づけになった。

大きな胸がぷるんと揺れた。
俺は思わず生唾を飲み込んだ。

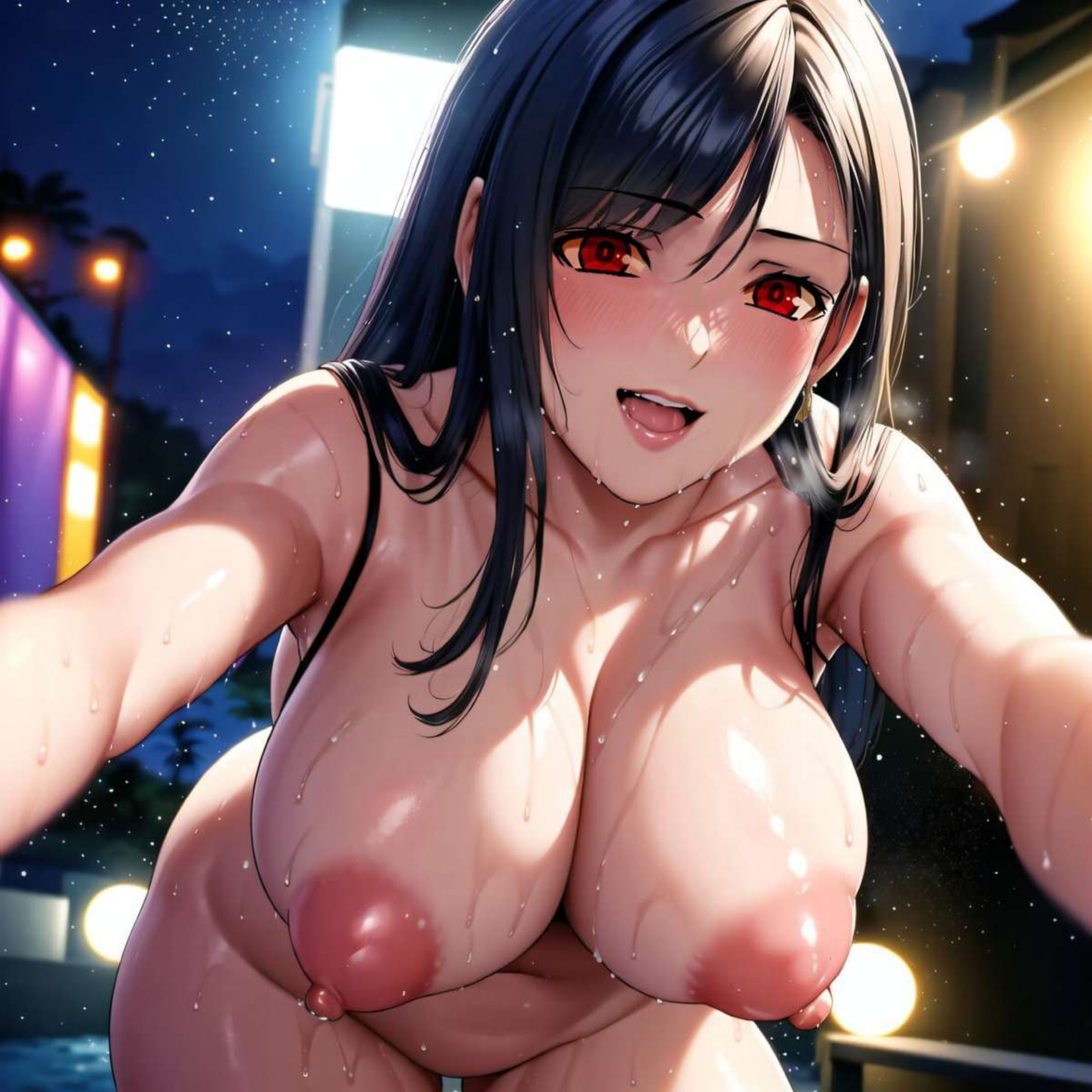


「どうしたの？じっと見つめちゃって」
ティファはクスツと笑って言った。

「いえ、なんでもありません」
俺は平静を装った。



「変なの」
ティファは不思議そうな顔で言った。





俺はティファと一緒に風呂に入った。

「ねえ……しよっか……」
ティファは俺の上にまたがってきた。



俺は興奮を抑えられなかった。
「いいんですか？」

「いいよ……あなたなら」
ティファは妖艶な表情で囁いた。





俺はティファの胸に吸いついた。
柔らかく弾力のある先端の感触を舌で楽しむ。

「あん……もっと強く吸って……」
ティファは甘い声を出しておねだりをする。



俺は言われた通りにした。

「ああっ！気持ち良い！もっと、もっと強くう！」
ティファは快樂の虜になっている。



俺は両手でティファの大きな乳房を強く吸い上げた。

「あああっ！ イックうううう！！！！」
ティファは絶叫した。同時に秘部から愛液が吹き出した。
「はあはあ……気持ち良すぎてイっちゃった」

はあ

はあ

ティファは息を切らしている。
「ティファさん、可愛いですよ」

俺は優しく抱きしめた。
ティファは俺に抱きついて離れようとしな





「今度は私がしてあげる」
ティファは俺を寝かせて上に乗ってきた。

そして、俺のモノを掴み自分の中へ挿入した。
「ああっ……入ってきたあ……」

あーん
あーん
あーん
あーん

ティファは歓喜の声を上げた。
「動くよ……」
ティファはピストン運動を開始した。

「ああ……すごい……大きいよお……」
ティファは艶っぽい表情で感じている。



あーん
あーん
あーん
あーん

俺は肉棒が根元までティファの中に入り込んでいるのを眺めていた。

あーん
あーん
あーん
あーん

「ティファさん……俺……もう……」
俺は限界を迎えようとしていた。

「出して……奥に出して！」
ティファはさらに激しく動いた。
「ああっ！出る！」



♡♡♡

♡♡♡

ビクビクビクビク
ビクビクビクビク
ビクビクビクビク

ドピュードピューピュールルル—————！！
俺はティファの中に大量に吐き出してしまった。
「ああっ！出てる！熱いのがたくさん流れ込んでくるう！」
ティファはビクビクと体を震わせている。





ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ティファが俺のを舐めている。
「んっ……れろっ……はあはあ……ちゅっ」
一生懸命奉仕してくれている姿はとても健気だった。



ドピュッ

そう言いティファは再び口に含んだ。
「もう……出る……うっ」

ドピュッドピュービュールルルル————！！

俺はティファの口の中にとっぷりと出した。



「んぐっ……んん……ごくっ」
ティファは全てを飲み干してくれたようだ。





「じゃあ、お礼に……」
俺はティファの尻の穴にイチモツをあてがった。

「えっ！？ちょっと待って！」
ティファは慌てている。



俺は構わず挿入した。

「ああっ、入ってくる！」
ティファは苦痛と快感が入り混じったような表情をしている。
「全部入りましたよ」



俺はティファの腸内が締まる感覚を楽しんだ。

「ああっ、すごい！」
ティファは涙を流しながら喜んでいる。



俺は激しく打ち付けた。
「ああっ、ダメえ、壊れちゃう！」
ティファは大きな声で叫んだ。

「ティファさんのケツマンコ最高です」
俺は容赦なく攻め立てた。



「そんなこと言わないでえ！ 恥ずかしいよお！」
ティファは顔を真っ赤にして悶えた。

「そろそろ出しますよ」
俺はラストスパートをかけた。



「ああっ、きて！中にちょうだい！」
俺はティファの最深部を突き上げ大量の精子を流し込んだ。

「ああっ、すごい！たくさん出てる！」
ティファは体を仰け反らせて絶頂を迎えた。



「はあはあ……」
ティファは肩で息をしていた。
「大丈夫ですか？」
俺は心配になって尋ねた。
「大丈夫よ、気持ち良かっただけ」
ティファは満足そうに微笑んでいた。





俺たちはホテルの部屋で一夜を過ごした。

朝になり目が覚めると、隣には裸のティファが眠っていた。
昨夜のことを思い出すと
あれだけ出しまくった俺のモノが、またいきり立ってきた。



俺はティファの股間に手を伸ばしクリトリスを刺激した。

意外に起きない。
俺はさらに刺激を強くしてみた。
「んっ……んん……」



クワクワクワ

「あんっ……だめ……」
ティファは目を覚まし、身をよじり抵抗する。

「おはようございます、ティファさん」
俺は挨拶をした。



クリクリクリ

「もう、こんなに硬くなってる」
ティファは俺の大きくなったモノを見て呆れたように言った。

「ティファさんのせいです」
俺は正直に伝えた。
「しょうがないな……」



ティファは起き上がり、俺のモノをしゃぶり始めた。
「ジュポッ、チュパ、レロオ」
舌使いがとても上手だ。

すぐにでも達してしまいそうだ。



「ティファさん、出ます！」
俺は我慢できずティファの口の中で果てた。
「んんっ、んぐっ」

ティファは喉を鳴らして飲み込んだ。



「ふう……ごちそうさま」
ティファは妖艶な笑みを浮かべた。
「さて、シャワー浴びようか」

ティファは立ち上がり浴室へと向かおうとしたが、俺は後ろから抱きつき
そのまま押し倒した。





きゃっ、どうしたの急に」
ティファは驚いた様子だ。

俺はティファを無理矢理四つん這いにし
バックで犯した。
「ああっ、いきなりなんて酷いよ」



俺はさらにスピードを上げて突いた。

「あんっ、あんっ、あんっ」
ティファは激しい快樂に耐えられず、ついに崩れ落ちた。
しかし、俺はそれでもやめない。







「もう、エッチなんだから」
ティファは笑顔を見せた。

「すみません、どうしても我慢できなくて」
俺は申し訳なさそうに謝った。
「いいの、私も同じだから」

A photograph of a hotel room. In the center is a bed with a dark wood headboard, two white pillows, and white linens. On either side of the bed is a wooden bedside table with a lit lamp. The wall behind the bed is a light beige color. To the right, there are light-colored curtains. The room is dimly lit, with the primary light source being the bedside lamps and a wall sconce on the left.

「これから、どうします？今日は休みにしてあるんですけど」
俺が尋ねると、

「あなたと一緒にならどこでも良いわ」
ティファはそう言ってくれた。

俺たちは服を着替えた後、ビーチへと向かった。





「海綺麗ですね」「本当ね」
2人で浜辺を散歩した。

「ねえ、この貝殻お土産にしよう」
ティファは貝殻を拾って見せてきた。



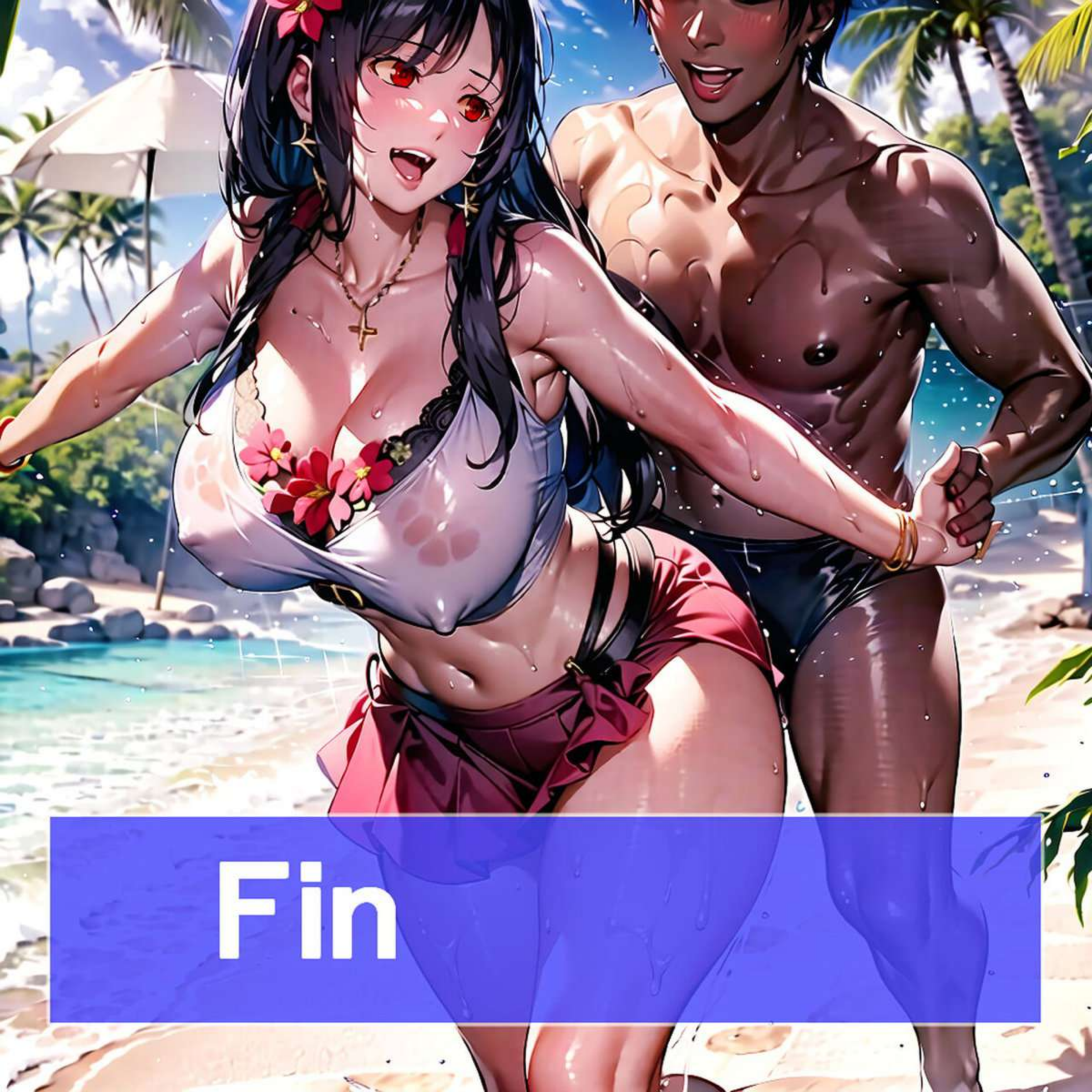
俺はその光景に見惚れていた。
「何見てるの？」
ティファは不思議そうな顔で聞いてきた。

「いえ、何でもありません」
俺は誤魔化した。



「変な人」
ティファはクスッと笑って言った。

彼女とも今日で最後のバカンス。
この南国の島での思い出は
一生忘れないだろう。



Fin













...ん♡







アハハハ

アハハハ



キ
ス
ッ
ッ

ア
ニ
ム
ミ
ア
ニ
ム
ミ





お風呂
お風呂
お風呂







天御脚



!!
!!
!!

!!
!!

!!
!!

!!
!!
!!



ああ
♥

ああ

ひんあし

あしん♥

FLO















アッ

おっ

おっ

アッ



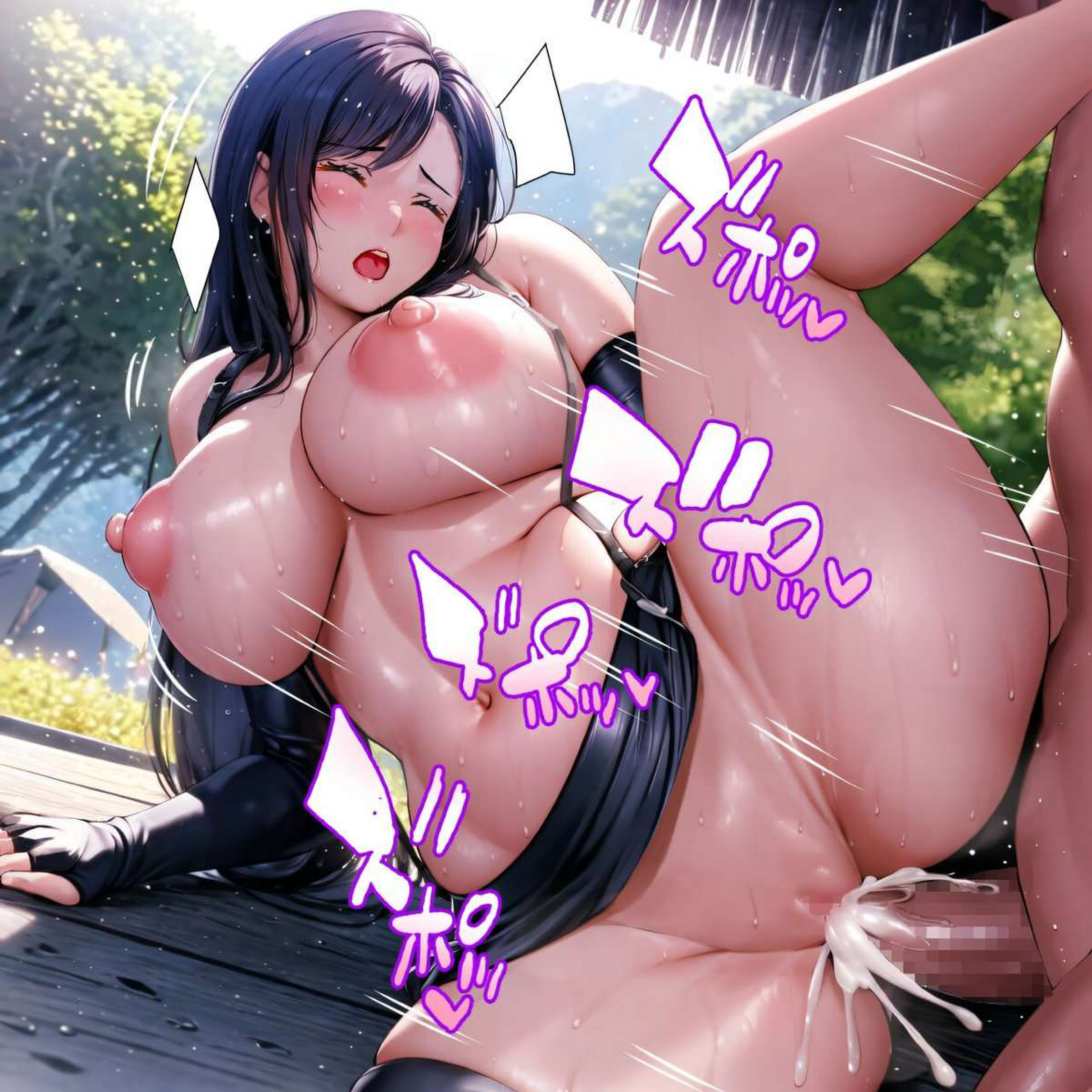


あ

いそ

あ

...





シャワー

ズッ















ア
ニ
メ



あーっ/っ/っ...

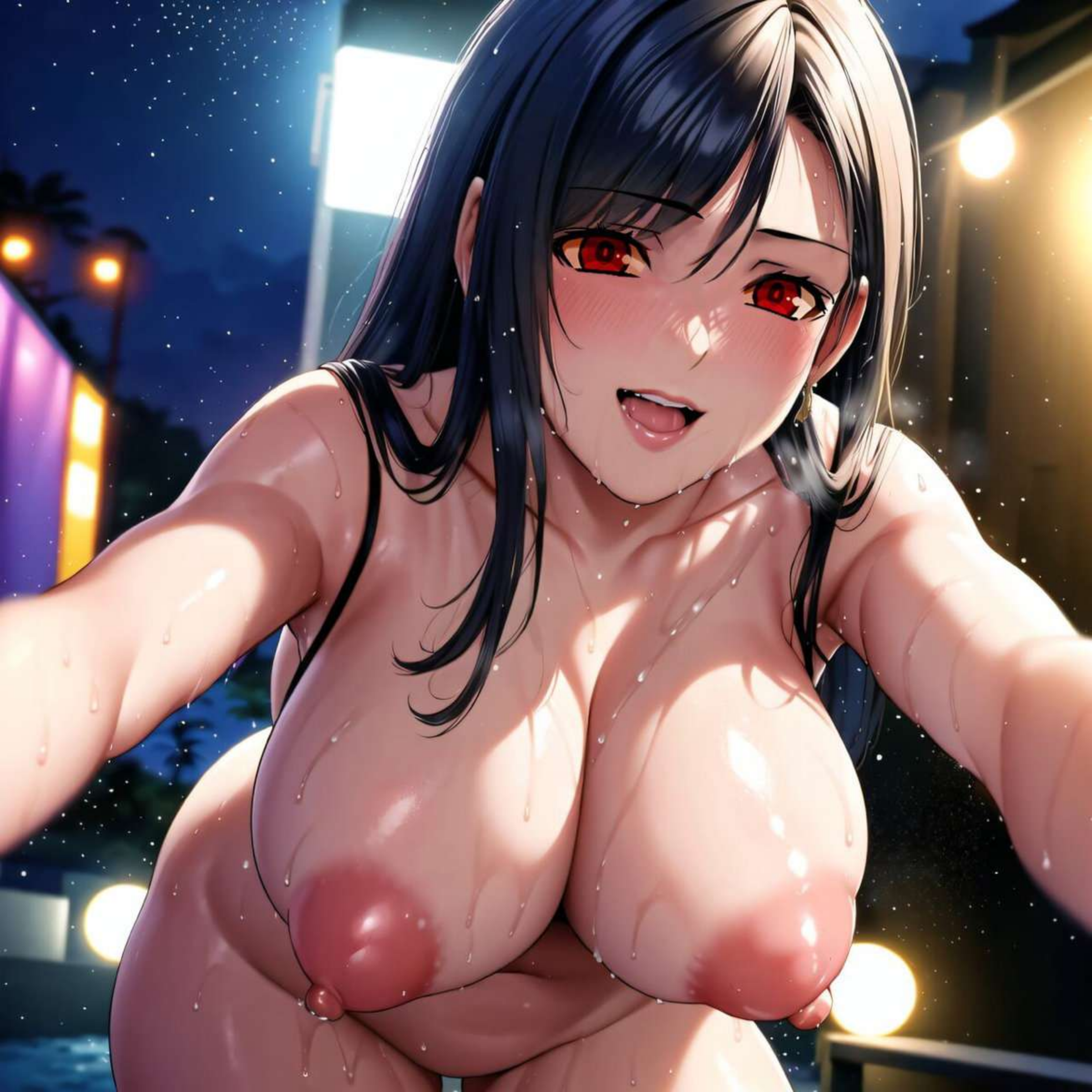




















はあ
あ

はあ
あ





んっ♡

んっ♡



세
70
세
70
세
70
세
70





おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい



アノコ
アノコ

コ
クッ











ניר ניר ניר





くっくく
くっくく
くっくく
くっくく





ああ



FO
シ
シ



















